

『たかやまの』の思ひ出

二つの太鼓 宮太鼓とクラシックドラム

二八回生 永岡 英樹

東京から見て千里山は、西南西 West-southwest と西の中間帯にあり、その方位名を西微南 West by South と言うそうである。一方、自宅から臨む富士山もその西微南にあり、私は右斜面の中ほどの遙か先に千里山の第一噴水があるものと決めこんで、眺めている。

もつとも丸い地球のことだから、山がなくても地平線の下に隠れるぐらいには考えていたが、昨今の便利な計算ソフトによると、我が家からの地表の最短距離で 387.13km 先にある下の噴水は高さ 10,500m まで吹き上がってくれないと、理論上、もちろん理論上だけが天辺も見えないらしい。ただ、そんなに低い所にあるとしても、六十年前のこの噴水は心眼でよく見えてくる。

この太鼓は打つという方が似合った。

どんどんどんドコどんドコどんカッカッ
この主題に変奏を組合せた曲のパターンが三種程指されたと覚えていて、二人が向かい合い白木のバチを両手に持ち、相手と同期化して打つ。ただ歩く速さでのアンダンテに加え単調な反復のことである。二人共ミスせずに長く打ち続けるのが如何に難しいことか！最初の内は笑い転げていたが、ペア対抗戦が始まると目の色が変わり、週末にはパーフェクトも出始めた。それでも散漫、邪心、疲労と闘って、普通にできるようになったのは、ぎりぎり本宮の二日前だった。

祭りの朝、肌襦袢、桃色の直垂と股引、手甲と白足袋装束、白粉を首まで塗られ、口紅をさされ、襷がけに赤烏帽子と整えられて、自宅から車で神社に向かった。

愈々、紅白幕に連提灯の山車に乗り込む。打ち始め、動き始めると、ふいに耳元でぴーひやらりと横笛の音が鳴り驚いた。横見はできずレコードかなと想像する他なかったが、休憩の番が来て真つ先に見回すと、笛の主が見つかった。確かに鉢巻に祭り姿の大人の方が

◇ ◇ ◇
六年生の十月、千里山の稲荷神社の秋祭で山車に乗り宮太鼓を叩くことになった。その二週間前の夕方に、頂いた手紙を携え、ここに二階なんかあったやろかと思いつつ、上西文房具店の脇の階段を上がって行くとガランとした大広間に出た。まだ誰も来ておらず、窓に寄って外を見下すと噴水がまん丸に近いのが新鮮で坂の上から西日が射し込んで眩しかった。

やがて自治会、商業会の人たちが来られて訓示があり、翌週からの九日間、下校後境内の社務所で四人が特訓に入ることになった。

お稲荷さんの太鼓は堂々としてとても格好が良かった。皮の表面が滑らかで、張りが素晴らしい。前回張り替えた年月が、皮の縁に沿い黒々と大書してある。そつとバチ先を落としてみるだけで、重低音が響き、長く止まない余韻に私はどぎまぎし、嬉しくなった。

—当時オーケストラで叩いていたベースドラムはドンと短く素っ気がない上、鼓面を手でおさえて音を切ることさえある。マレットの先端の玉が音をくすませると言えなくもない。弦楽器の和音を引き立てるため音量には指揮者から厳しい指示が飛び、随分違う—

同乗して吹いておられる。何うと大学時代から和楽とフルートの奏者であるとのこと。今どなただったか思いだせず大変失礼なことだがとても懐かしい。その名人のどつとおきの技で、小学生の我々は完全にお祭りモードに入って、勇み立ち、打ち手に戻るのであった。もうガチガチでなく、節のついた声の出るほど解き放たれたアンダンテになっていた。

打ってまた腰かけて汗を拭くと、慣れ親しんだ街並みが高い視線の下をゆっくりと山車の後方に流れて行き時々金木犀の芳香に包まれる。角々で手を振り拍手してくれるおばさん達の笑顔や声が励みになり、楽しみにもなった。公民館の坂を下るともう何度目かの噴水に出る。ぐるりと時計回りで半周して、今度は中川書店方向に向かう。畳屋さんや更科さんの通りだ。当時あった母の美容室シャンクレールの人達も白衣のまま出てきてくれていた。ここは会誌頻出のこの本屋さんを過ぎ、貝塚伊吹の生垣を挟んで先隣りにあたる角で、石段を六つ上がった所があった。山車はそこで右折し西へまた坂道を上がって行く。

ペアで何度も交代しながら今でいう千里山西の、順序こそ定かでないが、辻という辻を隈なく練り廻った。

神社に戻り着き、参拝して神聖な経験のお礼を述べて解散したのは四時過ぎだったと思う。



二八回生 永岡 英樹さんの紹介

編集部 追記

保良（現グレース）幼稚園に二年保育から

千里第二小 — 吹田第一中 — 大阪府立春日丘高

— 大阪市立大学 — 全日本空輸（株）入社

1971年に東京に転勤となるも、東京千里山会に2か月遅れで入会できず。

その後、全ての千里山会総会には、東京転出中だったため、ご参加できなかったそうです。

漸く第14回よりご入会していただきました。

二カ月後のクリスマスの翌日、千里第二小学校オーケストラは、毎日大阪会館十一階での文部省、府県教育委員会後援、第四回 NAB こども音楽コンクールの関西地方決勝大会にて、ブラームスのハンガリアン舞曲第五番で優秀賞を獲得した。惜しくも全国決勝大会進出は叶わなかったが、当校を上回る学校はなかった。因みにこの大会自体は、今も続いていて二〇一七年夏の予選から第六十六回を迎えるという。

総合指導の木島賢二先生と指揮者の北清市先生には、四年生下期から六年生の間、ご薫陶を賜った。

とりわけこの大事な時期に、洋太鼓と全く異なる太鼓のため練習を休むという大胆な願いに許可をいただき、しかも望外の温もりのある一言で迎えていたいただいて、一員に復帰できた時のことを忘れることができない。

おわり

なお、次ページは、永岡さんが5年生の折の千二小オーケストラの面々。

正面、前列 右端 木島賢二先生、左隣 北清市先生

最後列 左より3番目が永岡さんです。

